

D
e
a
r
G
o
d

須
谷
篤
司

* 人物表

私（小野寺）

30代前半 男性
医師

彼女

40代後半 女性
入院患者、数年前に失明、寝
たきりに。一時容態が悪化し
て、「私」の勤務する病院に
入院している。

* あらすじ

雪が降る静かな夜。主人公（私）は夜中に一人の患者の病室を訪れる。そこは、失明し体も動かない患者が入院していた。その患者（彼女）は、主人公に自分のことを話し始める。彼女には重症の食物アレルギーの娘がいて、その子のアレルギー対策に毎日奔走していたが、小学校の給食時に事故で死亡。その責任を追究するため、学校を責め続け、追いつめられた担任も自殺してしまう。後に、娘の同級生の母親の話で、事故は母親の事を想う娘が、アレルギー克服のため自ら起こしたものだど知った彼女は、アレルギー対策にのみりこんでいったのは、娘のためでなく、自分自身のためであり、そのため娘を追い込んでしまったこと。担任を自殺させてしまったことに気づき、そのことに苦しみ自殺を図るが失敗したことを話す。そして彼女は、主人公が自殺した担任の夫であり、自分を殺しに来たことに気づくが、主人公は何もせず病室を出てしまう。

病院前 (夜)

SE 新雪を踏みしめる足音。

私(ナレーション 以下N) 「雪には吸音効果があるというけど、こんな日はそれをよく体感できる。その日は、昼頃から降り始めた雪が、あたり一面白く霞む位大量に、そして静かに降り続いていて、その新雪をキュッ、キュッと踏みしめる自分の足音がするだけで、他は何も聞こえない、本当に静かな夜だった。そんな雪の中、私は自分の勤務している病院へと歩いていった」

二人の若い女性の話し声が少しずつ近づいてくる。

女1 「いやー、よく降るね。何とかならんべか」

女2 「こうゆう時、駐車場が遠いとつらいねえ」

女1 「いくら、職員用だからって、あんな離れたところに作らんでいいべき。車つくまで、雪だるまになっちゃうわ」

女2 「それよりもこれさあ、家の前雪かきせんと、中入れんでないかい」

女1 「準夜勤明けの雪かき、つらいなあ」

少しずつ遠ざかる話し声

私(N) 「一人一人分だけきれいに踏み固められてる道を、お互い遠慮がちにすれ違った。準夜勤明けの看護婦だ。よく見知った顔だけど、向こうは全く気づかない。どうやら私は外見的に全く目立たないらしく、白衣でも着てない限りは、人に気づかれることはないようだ。狭い町だから、街中を歩いてみると、よく見知った顔とすれ違うけど、一度も声をかけられたことはない。

たとえ、毎日顔を合わせている同僚がすぐ横を通り過ぎていっても、向こうは、全く私に気づくことない様子で、そのまま通り過ぎていくだけだ」

私(N) 「そんな私の外見も、普段なら少し寂しく思うところだけど、今日だけはありがたかった。ましてやこんな雪だ。少しずつむき加減で歩いていけば誰にも気づかれない病院に入ることが出来るだろう。病院の中でも、白衣さえ着てなければ、急患の家族か何かと間違えられるくらいで、私に気づくものはいないだろう。そう思ってた」

SE ピツ、ポツ、パツ、ピツ。と、4回電子音が鳴り、カチャと鍵のあく音がする。

病院内 (夜)

私(N) 「私は、職員用玄関にあるデンキー

に暗証番号を入れると、そのまま中に入った。そして、更衣室にはいると、自分のロッカーから、昼間用意したものを取り出し、そのままスーツのポケットに忍ばせ、人気の絶えた暗い病院内の廊下を、目的の病室に向かつて歩き出した」

SE カン、カンと廊下に規則正しく響く靴の音。暫くして靴音がとまると、今度はエレベーターのモーター音。そして、静かにエレベーターのドアが開く音がして、今度は、コツ、コツと反響しない足音がする。暫くしてその足音が止まると、一呼吸置いて、「フーッ」と大きくなため息をついた音。

私(N) 「私は、目的の病室の前で、大きくため息をつくると、静かに病室のドアを開いた」

彼女の病室 (夜)

SE 少しカラカラとスライド式のドアが開く音。

私(N) 「そこに、彼女は眠っていた。救急搬送でこの病院に運ばれ、一時はICUに入っていたけど、その時はもう容態が安定し、この個室に入っていた。来週には退院

するだろう。と言っても、元の病院に戻るだけけど・・・」

私(N) 「病室の窓にはカーテンがかけられていなかった。外灯の光があたりの雪に反射して、青く淡い光が、彼女の顔を照らし出していた。私は、ポケットから取り出したものを手にしたまま、その顔を暫く見つめていた」

彼女「誰か、いるんですか」

私(N) 「その声には、はっと我に返り、私は答えた」

私「起こして・・・、しまいましたか」

彼女「その声は・・・。小野寺先生ですね」

私「よく分かりますね。担当医でもないのに」
彼女「一度私と話した先生なら、声で分かります。目が見えないと、他の感覚が鋭くなるみたいですよ」

私(N) 「彼女は目が見えない。それだけではない、数年前から、彼女は体の感覚がほとんど麻痺していて、寝たきりで動けない。一人で食事を取ることも出来ない状態だ。両親はすでに他界し、夫とは離婚している上に、引き取ってくれる親戚も居ないから、病院を転々としながら、40代で早くも余生となってしまう日々を、することもなくただ漫然と過ごしているらしい」
彼女「ところで、だいぶ雪が降っているみたいですね」

私(N) 「まるで、窓の外が見えているのかのようなその言葉に、私はハッと息を飲ん

だ」

彼女「そんなに驚かないでください。この病院かなり防音効いていますけれど、夜は外の音が少し聞こえるんですよ。車の音とか色々。でもね、雪が降ると何にも聞こえなくなるんです。それこそ、全く音のない世界に閉じ込められたように、シーンとするんです。だから、却って中のちよつとした音が気になったりするんですよ」

私「すごいなあ。ホント見えてるみたいですね」

彼女「だから気になっちゃって。誰か入ってきた音がするけど、そのままじっと動かない。気配はするんだけど、音がしないからおかしいなあ。だからね、普段なら入ってきた人に声をかけることはないんですけど、我慢できなくて、声をかけちゃいました。でもね、どうしたんです？そんなところにボーっと立って」

私「あなたの・・・。顔を見ていたんです」

彼女「私の顔？なにかついてます？」

私「いや・・・。随分安らかな顔をしていらつしやるなって」

私(N) 「そう、安らか。私はあの時彼女を見ていたけど、当時とは全く違って実に静かで安らかな顔だった。いや、静かと言うよりは、むしろ虚ろで、全てを受け入れ、全てをあきらめている。そんな表情に私は思えた」

彼女「安らか、ものは言い様ね」

私(N) 「彼女は、独り言をつぶやくように

そう言って微笑んだ。いや、微笑んだように見えた。そのとき、彼女がほんの少し顔を動かしたのでそう見えたのかもしれない。ちよつと能面が角度を変えることで、笑ったり、泣いたり表情を変えるように」

彼女「先生。お時間あるなら少し話していきませんか？昼間寝ているから、夜眠れなくて。昼も、夜もおんなじなんですけどね。だから、少し付き合ってくださいよ。どうして、こんな表情をするようになったか、分かるかもしれませんよ」

私(N) 「次の巡回までまだ間があるはず。私は、その提案に乗ることにした」

私「そうですね。眠れないようなら、少し付き合ってくださいよ」

SE カチャリとものを置く音がしてから、ズズツといすを引く音。

私(N) 「私はそう言うと、手にしていたものを台の上に置き、いすを引いて、彼女のベットの脇に座った」

彼女「私ね。娘がいたんです。母親想いの、ホントにやさしいめんこい子。それも、望んで、望んで出来た子だったから、可愛さもひとしおだね。私ね、以前結構大きな会社について、そこでバリバリお仕事してたんです。会社でも頼りにされてたみた

いで、結婚しても暫く続けてたんです。仕事も面白かったし、遊びたかったのもあるし、子供なんて二の次。でもね。30過ぎると子供が急に欲しくなってる。すると、いざ作るとなっても、今度はなかなか出来ななくて。そうなると、今度は欲しくて、欲しくて、欲しくてたまらなくなってる。子作りの神社やら、体操やら、健康食品やら、もちろん不妊治療もやったし、いいと言われているものならありとあらゆる事をやったけど、それでも、なかなか出来なくて」

彼女「だからね。生まれたときはホントに嬉しくって、嬉しくって、嬉しくって。顔をみると、ホントめんこくて可愛くて。名前はまだみなくて。天の恵みとしか思えなかったから。だからね、そのときはお礼したんです。神様に。こんなめんこい子を私たちの元に遣わしてくれてありがとうございませう」

「なんだか分からなくて、先生の説明を聞いても全然耳に入らなくて。ただ、大変なことになったなああってだけ」

彼女「でもね。大変どころじゃなかったんです。小麦がダメとなると、パンやパスタ、そうめん、うどん、お好み焼きやたこ焼きなんか、当然いけないわけだし。卵だって、卵焼きだの、親子丼だの、子供の好きそうなものは全部ダメ。乳製品はもちろんダメだし、牛乳、卵、小麦と重なると、洋菓子類はほとんどアウト。その上、かまぼこやら、ちくわやらの加工品もつなぎに卵使ってるからダメだし。お醤油やお味噌なんかに、小麦が使われてるんですよ、知ってましたか？」

彼女「調べてみて愕然としました。これじゃあ、食べるものがないじゃないって。それから、必死になって食べられるものを探したんです。今は食品衛生法で決まってるから、アレルギーの原因になりそうなものは、必ず表示されているし、アレルギー対応の食品も増えてきているけど。あの頃は、食物アレルギーってのが騒がれ始めた時期だから、まだ色々整備されてなくて、探すのはホント大変だった。近くのスーパーじゃ全然ないから、遠くまで行って探したり、自然食品のお店を回ったり。それに、何でもかんでも除外すればいいって物でもないんです。育ち盛りだから、栄養のバランスも考えなくっちゃいけないし、第一、同

じものばつかしじや飽きちゃうでしょ。代用になるものを探して、なければ自分で作ったりして。アレルギー食用のレシピも一生懸命さがして。そうなってくると、自然と主人とは別のものになって。毎回、子供用のものと、自分たち用のものと、別々に作るようになって。そのときも大変なの。お料理するとき、フライパンやらお鍋やらに少しでも原因食物が残っているとダメだから、調理器具まで全部別々に用意して。食べるときも、私たちが食べているものを見て、子供が食べたくなったら可愛そうですよ。だから、先に子供に食べさせてから、見えないところに隠れて食べるようにして」

彼女「そんなに気をつけてもね、たまに除去できない時があつて。そのときはもう大変で、ゼーゼー言つて咳き込んで、呼吸困難になつて苦しんで、ひどいときは、アナフィラキシーショックつていったかしら？血圧が下がって失神状態になつて、急いで救急車を呼んだことも何度もありました」

彼女「そんなの見てると、もう怖くなつて、それこそ徹底的にやるようになって。朝早くから食材を探して回つて、そうして苦労して手に入れた食材の管理も、全部子供用と自分たち用ときっちり分けて、食器棚なんかも、二つ別々のものにして、お料理するときなんかも、全部、お台所をきれいに掃除してから、まず、子供のを作つて、そ

れから自分たちを作って、後片付けもきれいにやって。生まれる前は、出産後仕事に復帰するつもりだったけど、とても仕事しながらなんて無理だから、復帰もあきらめて。友達との付き合いもなくなつて。もう、生活の全てを子どものために注ぎ込んでいた感じだった」

彼女「でもね、そうやって、子供のことにどんだんのめりこんでいくうちに、私はこんなに頑張つてるのに、どうしてみんな分かってくれないんだろう、って思うようになってたんです。お店にいつてね、食材の中心とか、原材料とか色々質問するんだけど、店員はよく分かってなくて、トンチンカンな答えをする人ばかりで、終いには面倒くさそうに答える人までいて、気がついたら、店員さんを怒鳴りつけていたりして。たまに娘も、お外で食べたいって言うことがあって、私もたまには外食したいから、思い切って出かけてみると、あれこれ店員とお話してうちにまた怒鳴つてたりして。遊びに行つてもそう。遊園地なんかに行くと、屋台も多いでしょう。娘もね、見ると食べたくなつちゃうみたいで、一応買いに行つたりしてみるんだけど、そこでもまた同じで。そんなこんなで、買物以外はすっかり外に出ることもなくなつて。娘もそんなのを立て続けに見てるから、お出かけたの、って言うこともなくなつて。でもね、そんな娘を見てるとますます可愛そうに

なつて、どうしてみんな分かってくれないんだろうって、一層思うようになって」

彼女「主人もね、初めのうち少しは手伝つてくれたんです。でも、だんだんそうゆうの避けるようになって。それで私が文句ゆくと、忙しいから取り合つてもくれなくて。確かに役職になつて仕事が忙しくなつてきたのもあるんだろうけど。私も、主人に話すことは、文句や愚痴ばかりになつて。そのうち、それすらも聞いてくれなくなつて。終いに、お互い話すこともなくなつて。だからね、誰も分かつてくれなくなつていい。私がこの子を守らなきゃ。この子を守るのには私なんだ。私しかないんだって、思うようになったんです」

彼女「そんな娘もね、どうにかこうにか成長して、ようやく小学校に入る歳になつて。この頃になると、食物アレルギーも認知されるようになって、学校も給食のほうで色々対策してくれることになつたんです。娘も一人だけお弁当と言うのもかわいそうな気がしたし。それこそ、栄養士さんとも、担任の先生、吉田先生つて言う女性の方なんだけど、その方とも何度も何度も打ち合わせして、学校で対応しきれないところは、私も協力するようにして、何とか娘もみんなと一緒に給食を食べるようになつたんです。初めのうちは、私も不安でたまらなかつたけど、担任の先生もいい方で、熱心にやってくれてたし。娘もみんな

と一緒に給食を食べることが、本当に嬉しかったみたいで、毎日、給食に何が出たか教えてくれて、盛んにおいしいって言つていて。だからね、給食にしてよかったな、つて思つてたんです」

彼女「でもね、それから半年ぐらいして、急に学校から電話がかかつてきて、娘が倒れたつて言うんです。給食食べてたら、急に咳き込んで、呼吸困難になつて、そのうち失神したつて。私もとるものもとりにあえず病院へ駆け込んだけど、着いた時にはもう手遅れで。娘は、そのまま、二度と意識を戻すことはなかつたんです」

彼女「最初は、何が起つたのか、全く分からなかつて。お葬式のときも、頭の中が真っ白で、ただただ、泣きもせず呆然としていたみたい。傍から見て、ちよつとおかしくなつてしまつたように見えてたみたい。で、火葬場に行つて、骨になつちやつた娘を見たとき、ああ、もういなくなつちやつたんだつて、やつと分かつて、そのまま泣き崩れてしまつたみたい。正直、それから暫くのことはあまり覚えてなくつて。とにかく、初七日過ぎるくらいまで、一日中泣いていたみたい」

彼女「主人もね、泣き続けている私を見てね、さすがに慰めようと思つたみたいで、色々話しかけてくれたんです。でも、そのとき主人がね、また作ればいいじゃないか、つて言ったの。その言葉が私信じられなくつ

て。だって、私たちの娘が、かけがえのない娘が死んだのにね。おもちやでも買い換えるみたいにも、また作ればって、信じられませんか？もう、大声あげて怒鳴って、周りにあるもの全部投げつけて、もう出てって、顔も見たくないって。主人とは、それっきりです、話もしていない。そのまま離婚しました」

彼女「それから、学校に行っただけです。どうしてこんなことになったのか知りたくて。その日はカレー用にナンが出ていて、アレルギー対策したのも、きちんとあつたのに、何も対策してないナンを食べちゃって、あんなことになったみたいだったから。それでね、どうしてあんなことになったのか。あれだけ打ち合わせをして、万全の対応をとっていたはずで、こっちも安心していただいたのに、どうしてあんなことになってしまったのかって、学校に聞いたかったです。するとね、学校のほう、担任の先生が言うには、きちんと分けて管理して、給食係も娘にはちゃんと対策したものを配って、先生もそれをしっかり確認したって。だから、どうしてこんなことになったのか分からなくて。終いには、娘がわざと対策してないものをとってきて食べたとか思えない。って言うんです。私は、そんなこと信じられなかった。娘にはアレルギーのこととはしっかり話して、対策してないものは絶対食べちゃいけないって言い聞かせて

いるし、娘もそのことをしっかり理解しているから、そんなことありえないって。学校が責任逃れのため、そんな事言ってると思えないって、そのときは思ったんです」

彼女「それから私ね、毎日学校に通ったんです。必ず、原因をはっきりさせるって。校長先生や教頭先生、教務主任、栄養士。もちろん、担任の先生も。毎日毎日毎日、時には深夜まで、とことん話して。でもね、そんなことしても原因なんて分かるわけなかったし、そのことも分かっていたんです。だってね、その頃は原因なんてどうでもよくなつて、とにかく、私からあの子を、全てを奪った償いをさせるんだって、そのことしか考えてなかったんです。学校側も責任を全面的に認めるところまでいったんだけど、それでも、私は毎日毎日何時間も話に行つて。そのうち、校長も教頭もみんな逃げちゃって、担任の吉田先生だけが、相手するようになって、その先生も、授業が出来なくなつたから、担任を降りて、ほぼ私の担当みたいになつて。それでも、私は毎日毎日行つて、話して、責め続けて。とうとうその先生、自殺しちゃったんです」

彼女「そのとき私、逃げられた！って思つたんです。だから、最後に文句の一つも言つてやろうと思つて、お通夜に行つたんです。ご親戚とか、学校関係者の方とか随分驚い

ていたみたいだけど。したらそこでね、私に話しかけてきた人がいて。娘の同級生のママで、娘にお線香を上げにいきたいって言うんです。だから、いいですよ、いつでもいらしてくださいって、そのとき答えたんです」

彼女「その二日後くらいにね、彼女が来たんです。そして、お線香を上げてから、少しお話をしたの。そのときにね、その人の娘さん、同級生の子ね、うちの子が他の子のナンと自分のを取り替えるのを見たつて言うの。そんなわけないって、もしそうだとしたとしても、なして今頃言うのって、私言つたの。したらね、怖かつたつて言うの。前に娘がその子の家で、お菓子のかけらを口ににして、具合悪くしたことがあつて、そのとき私、怒鳴り込みに行つたの。そのとき凄く怖かつたらしくて、その子もその子のママも、今回のこと言え出せないでいたらしいの」

彼女「更にこんなことも言つたの。私が怒鳴り込みに行つた後に、娘が一人でその子の家に謝りに行つたつて言うのね。そのときもね、娘が隠してあつたクツキーから、かけらちよつと取つて、こっそり自分で口に入れたらしいの。それでね、なしでそんなことをしたのつて娘に聞いたら、練習だつて言つたらしいの。アレルギーを治す練習だつて。アレルギーのせいで、ママが大変な思いをしてるから、しょっちゅう疲れた、

しんどいつて言ってるし、そのことでパパといつもけんかしてるから。だから、早くアレギーを治したら、ママとおいしいもの食べに行くんだって、ママたまにはおいしいもの食べに行きたいって、テレビ見て言ってるから。そのお店、全部覚えてるから。アレギーを治したら、ママと絶対に全部食べに行くんだって。だから、練習してアレギー絶対直すんだって」

彼女「私ね。その時になって、やっと気づいたんです。私、あの子のために頑張っていたんじゃないことに。仕事も、友達も、夫も失っていく中で、あの子を、あの子の病気の世話をすることを抛り所にして、それが如何に大変かを周りに顕示することで、自分を保っていたことに。そのことがどんなあの子を追い詰めていたことに。そして、その抛り所を失ったとき、自分を保つただけに、他人を追い詰めてしまったことに。そうなの、先生を殺したのも、あの子、めぐみ、めぐみを殺したのも、全部私だつてことに」

彼女「それからは、地獄でした。後悔、懺悔、憐憫、贖罪、自己嫌悪、ありとあらゆる負の感情が一気に押し寄せて、苦しくて、苦しくて堪らなかつた。だからね、その苦しみから逃れたくつて、家にある洗剤やら薬やら、毒になりそうなものは全部飲んだんです。一回で飲めないから、吐いては飲み、

吐いては飲みして、そのうち意識が遠くなつて。気がついたら、病院のベッドにいたんです」

彼女「間が悪いんですね。別れた主人がね、忘れ物を取りに偶然来たら、私が倒れて、それで救急搬送されて一命を取り留めたんですつて。でもね、目も見えないし、体もほとんど動かないから、死ぬことも出来なくなつちやつて。しかも、頭だけははっきりしてるから、苦しいのだけはそのまま変わらなくて。その苦しみを抱えたまま暗闇の中に閉じ込められちゃったんです。もう考えることしか出来ないのに、考えるど苦しくて。苦しくて、苦しくて、苦しくて。のた打ち回つて。苦しみぬいて、ふと気がついたら、そこを突き抜けちゃつて、苦しみを感じなくなつたんです。でもね、他の事も一切感じなくなつたんです。嬉しいことや悲しいことや、怒りや妬みや憎しみも何もかもぜんぶ。でも、その頃からね。時々安らかな顔してると言われるようになったんです。そうよね。心の中何もないんですもの。静か、今日みたいに静か。雪のような心の澱がただ積もつていくだけ」

— 間 —

彼女「先生、どうしてこんな表情になつたか、これでわかりました？」

— 間 —

彼女「それより先生、何か特別な用事があつていらしたんでしょう」

— 間 —

彼女「私を終わらせに来た。違いますか？」

ハツと息を呑むかすかな音

彼女「驚きました？だつて、こんな夜中に先生が、白衣も着ないで来るなんておかしいでしょう」

私「どうして、白衣を着てないって」

彼女「こんな雪の日は、本当に何も音がしないから、聞こえるはずの音がないと却つて気になるんですよ。この先生、みんなよく糊の効いた白衣を着てらっしゃるから、必ず動くたびにカサカサ音がするんです。でも、そんな音全くしないから、白衣は着てないなつて。それと、さつきそこに置いたの、注射器でしょう。音で分かるの。筋弛緩剤か何か？」

彼女「あとね、思い出したんです。吉田先生のお通夜行つた時、お名前が違うからおかしいなつて思つたんですよ。どうやら、学校ではそのまま旧姓で過ごしてみたいみたいで、ホントは小野寺さんつて言うみたい。旦那さんは大きな病院の先生だつて聞き

ました」

— 間 —

彼女「いいんですよ、先生。あなたの好きになさって」

私(M) 「私は、たまらず病室を出た。そして、二度と彼女に会うことはない」

SE カラカラと戸が開く音。

むぎすぎます」

— 間 —

そして、すすり泣く声(私)

私(M) 「これが事の顛末だ。結局、君の復讐は果たせなかった。でも、同情したとかそういうのではなくて、ただ、怖気づいたんだ。ここで事を起こせば、彼女が抱え込んでるものを、そのまま私が引き継いでしまうんじゃないかって」

私「す、すみません。私には出来ない」

— 間 —

すすり泣く音だけがしている。

私(M) 「君なら分かってくれると思ってる。そして、虫のいいお願いだけど、君の近くにいたら渡してくれないだろうか、この手紙を、彼女の手紙の代わりに」

彼女「そう、まだ逝けないの。今なら呼んで貰えると思ったけど」

— 間 —

紙を、彼女の手紙の代わりに」

— 間 —

(了)

彼女「じゃあ、お願い聞いてもらえるかしら。

私の変わりにお手紙出してください、神様に。私の声はもう聞いてもくれないから」

彼女「一つだけ、聞きたい事があるんです。

どうして、神様はあの子を私の元に遣わしてくれたのかって。あの子、私の子でなければ、もつと平穩に過ごせたと思うのに。私を戒めるためと言うなら、神様、それは